魂の檻

レシピエント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魂の檻

【Ｎコード】
Ｎ０９２０Ｚ

【作者名】
レシピエント

【あらすじ】
これといった特徴のない僕でも、彼女ができ、なんでもない日常を送る。
毎日に大きな変化はない。
それでも幸せだった。
僕の人生は１人の人間に引き裂かれ、僕の心は、魂は苦しんだ。

…今、ここに、なぜ、生きている？

ストーリが書いていて、中々進まず、読んでいる方は余計に遅く感じるかもしれません。
それでも読んでくださる方がいれば、うれしいです。

日常の朝

おれの築いてきた２４年間はどこへいった。

彼女はどうなった。

なぜ？

…どうしてーーーーー

「起きなよー」
彼女のこえで目が覚める。
何か嫌な声を聞いたようなきがしたけど…
思い出せない。
僕は篠田　慎（まこと）２４だ。

いましがた僕を起こしたのは島田　咲。大学からの同級生だ。

「もぉ、休日だからって寝てないで遊ばないと、すぐ月曜日になっちゃうよぉ？」不満げにいう彼女。

「はぁー、もうちょっと寝ようよ。ね？」抵抗する僕。

ばさっ…

「あーー！！」

…やられた。
ガードが甘かった。

「掛け布団引っぺがすなんて…どこぞの親がよくやるアレじゃないかぁ…」

不満を漏らすも全く動じない彼女。
しょうがない。起きて付き合うか。。。

「わかったわかった。こーさん」

降参のポーズを見せて起き上がる。

「へっへぇー。今日はショッピング行ってランチ食べるんでしょ！」

アレ？そんなこといってたっけなぁ…

「忘れた？忘れたふりしてもいくのは決定だかんね？？さっ、準備準備！！」

「えぇ、もう行くの？朝ごはんはないの？？」

「え？もう食べたよ」

「へ？誰が」

「あたしが！」

「……僕のは？」

「ランチに合併されちゃった！」

ニヤっと彼女に口が広がる。

この顔は嫌いじゃない。

あぁ、しばらく腹ペコでショッピングさせるつもりだ…

そんなことを考えながら準備をするのだった。

出会いと提案

彼女と知り合ったのは大学の…
はずかしながら…コンパだ。9月ごろだっただろうか。
まぁ、彼女はともかく、僕は楽しいキャンパスライフに花を…とかアホなことをかんがえてたので、友達が開いてくれるコンパの常連だった。

特に目立つ訳でも、話がうまいわけでもなかったし、毎回結果は惨敗だったのは言うまでもないが、見た目は普通だと思ってたし、服装にもある程度気を配っていた。

言ってしまえば、良くも悪くも平凡だったのだろう。今考えてみれば、良くもまぁそんな成りでコンパなんか行けたなぁ…と思わなくもない。
まっ、彼女欲しさに焦ってたんだ。

そんな中、ある日のコンパで会ったのが彼女。
どういきさつで彼女がそのコンパにいたのかは知らないが、その日のコンパで僕からみれば一番いい子だった。

言うまでもなく徹底的にアプローチをかけたけど、僕には全く関心がなさそうだった。会話が続かなかった。

それでも諦めきれなかった僕は、帰りの方向が同じだと嘘をついて二人だけになるように頑張った。

きっと彼女にも見え見えの嘘にしか見えなかったことだろう。
そんな彼女を相手に僕の話術で話が続くわけもなく、やがて二人ともだまりこんでしまった。
僕のスニーカーの擦れる音と彼女のヒールがアスファルトを叩く音だけが妙に響く。
今日もダメだ…
もう別れて帰るかな…

「……くていいのに」
口を開いた…
「えっ？　なんていった？」
声がかすれて聞こえなかった。

「飾らなくっていいのに…っていったの。」
「どういう…こと？」
意味がわからなかった。

「そのまんまじゃない。コンパでだけかとおもったら、今だって…
なに一つ自分を出さない。口を開けば当たり障りのないこと。そんなんであたしに近づこうとなんてしないで。」

「…そんなこと……」
…ある
言葉が続かない。

一気にまくし立てられた。彼女の口は今の僕を正確に表していた。
自分でもそこまでひどいとはおもっていなかった。
思い当たる節があるから…余計に反論できない。

「ごめんね」
唐突に謝る彼女。
まだなにもいえなかった。
それでもなんとか振り絞る
「いや…その……う、うん」
ほとんど言葉になっていない。

「でもね、たとえコンパであっても、近づこうとしてるくせに、あなたを見せてくれない態度に不満でね…」

「……ごめん」
再び黙り込んでしまった。
しばらくして、もう一度彼女が口を開いた。

「じゃあ、もう一回だけチャンスあげる。あたしが納得したら、満足したら、付き合ったげる。」
変な提案だった。

「…どういうこと？」
意味がわからない。
いや、言ってる意味はわかる。
でも…いい条件ではある。だからなおさら分からない。

「だから、今度会うときに、君が本当の自分を出して。君が本当の自分を出してるってあたしが判断できたら、合格。」

「…合格…？」

「そっ、合格。やる？やんない？好きにしていいよ」

からかわれてんのかな…？

だいたいどうやって…

本当の自分を、って…

でも、もしかしたら…付き合えるかもしれないし。

「よし。やらしてください。」

「やるのね！じゃあ、日程はメールするから、メアド教えて？」

おぉ！メアドゲット！！

なんて思ってたら、顔に出てたのかもしれない。

「あたしがいいっていうまで、確認のメール以外受け付けないから。」

…釘を刺された。

「えっ、あぁ、わかった」

ばれたか。

「じゃあ、ここまでいいよ。君も帰んなよ。どうせこっちの方面じゃないでしょ？」

またばれてた。

「あー。うん。知ってた？ごめん。」

そう言ってその日は別れた。

試験：デート

コンパの次の日もそのまた次の日も、彼女からのメールはこなかった

あまりにメールがこなくて、やっぱり騙されたのかと思い始めていた。

そうして２週間後。
メールがきた。

２０１１／９／２７（Ｔｕｅ）　１８：２４
――――――――――――――
Ｆｗ：日程
――――――――――――――
今度の日曜日なら暇だけど…
その日は空いてる？
お昼過ぎからならだいじょうぶだよ。

島田　咲
――――――――――――――

嬉しかった。
もちろん返事はＯＫだ。
素早くメールに返信する。

送ってしまってから思い出した。
そうだ。ただのデートじゃないんだった。
これで失敗したら二度とチャンスが無いんだった。。。

なにをしたらいいかな。
どこに行けばいいだろうか。
なにを着れば…

待てよ。
彼女は「自分を、ありのままを」て言ってたよな。それだったらむしろ、普通の日と変わらない方がいいのか？

普通は…
どんなんだっけ
いつも通り…いつも通り…
あーわからん。

だめだ
考えれば考えるほど分からなくなる。

ひたすら考えた。

ーー
そうだ！
今きてる服は少なくとも意識してない。
これだ！！！
場所はいってから決めた方が自然かな？
じゃあ、考えなくてもいいんだな…

そう考えて急に楽になった。

「とりあえずそれまでは大学のレポートでもやりますか」

悩むのをやめた。

一応待ち合わせの駅とお昼頃の待ち合わせのメールだけいれておいた。

ーーーー

「１０月２日、日曜日のお昼のニュースの時間です」

アナウンサーが僕に向かって原稿を読み上げる

僕はというと、日曜の昼だというのに、まだ寝ぼけてる。

起きてテレビを眺めながらインスタントコーヒーを飲む僕。

ひたすらしゃべるテレビ。

「…今日未明、…県…市のマンションの一室で一人暮らしの女性が遺体で発見されました。鍵は壊されておらず、交友関係のあるものの犯行とも思われましたが、最近頻発している一人暮らしの女性を狙った事件との関係性も視野にいれて操作を進めるとのことです。さて、続いては今日の…」

物騒だな。そんなことを考えながらケータイをチラリとみると、着信を知らせるランプが点滅している。

メールを開いてびっくりした。

いずれも彼女…島田　咲からきている。

内容をみて変な汗が出てきた。

「やばいやばい。今日だった今日だった。。。。」
焦ってなにからやっていいのか分からない。
「き、着替えなきゃ」
その辺にあった服をひっつかんで猛ダッシュで着替え、おしゃれもそこそこに飛び出した。

駅についてみると、待ち合わせの時間５０分ほどオーバー。
もういないかな…とおもったら…いた。

大慌てで近寄って
「ごめんなさい」
と、手を合わせて謝った。

…無言
これはまずいぞ…
一回きりのチャンスだったのに。
顔を上げるのが怖かった。

ーー
クスッと笑う音をきいた気がした。
あれ？
そんなはずはないと思いながら、顔を上げる。
…笑ってた。

「は？」
意味が分からなくなって思わずそう言ってしまった。
彼女が口を開く
「ちょっと、いくら自分を出せって言ったって、そんなアホな一面

わざわざ見せなくたっていいのに。」
…意味が分からない。
「あ、アホなって…たまたまだよ。今日は…その…寝てた。」
言い訳が普通すぎる。
「ほらぁ。それに服だってシワッシワじゃんか。髪もくしゃくしゃだし。そこまでリアルにヤンなくてもいいのにさー」
「演出じゃないよ！！今日は慌ててきたから…」
弁解する僕。
「そこがアホな部分なんだって！」
逃げられないな…
「アホ…か」

一応、デートがダメになったわけじゃ無いみたいだ。
良しとするか。
どうも今の僕の状態が素を出した結果だと思われてるらしいのは不本意ではあるけど…

「で？今日は名にするか決めてるの…？」
変なことを聞くなぁ…
「ありのままって言ってたから決めてないよ…？」
僕は悩んだ末の答えを自信を持って答える。
これでもう彼女は僕にメロメロのはずだ。
「はぁ？なにいってんの？」
信じられない様子だ。
「え？でも、ありのままってそういうことじゃ無いの？…ねぇ？」
「ありのままって…それじゃあただのずぼらかマヌケよ！！」
そう言い放つ彼女。
あぁ、なんか心がいたいぞ。
「ずぼらにマヌケって…」
「まぁいいわ。とりあえず昼ご飯でも食べましょ。」

飽きれつつも笑ってくれる彼女。
自分が行き先は決めることにしたようだった。

彼女とのはなしは話せばキリがない。
結論から言うと、その日の夕方、僕のどこか抜けていたところを僕の「ホント」として認められ、同時に僕のことも付き合う相手として認めてくれた。

最初は外側だけの「好き」がたった一日だけど中身もひっくるめての「好き」に変わっていった気がした。

変化の始まり

それから、彼女と僕は大学生活の４年間を週末ごとのデートを楽しみに過ごした。

彼女との時間は楽しくて、何よりも、楽だった。
最初の頃こそ、何かやることがないといけない気がしていたけれど、本当は何も意識せずに自然に、普段通りにしていてもいいんだということにしばらくして気づいた。
だからといって、一日中グーたらしていたわけではないけど。
何の気なしにふらっと出かけてみたり、家で映画をみたり、食事を作ったり…
１人だった時にやっていたことと変わらない生活のスタイルでも、全てがどこか面白く感じた。

もちろん性格上合わない部分だってあったけど、理解できないわけではなかった。

そういう意味で僕には彼女と一緒にいる空間は居やすかった。

４年間の大学生活と就職を経て、就職が決まった頃、一緒のアパートに住み始めた。

今まで住んでいたところだと通勤が大変だったこともあったが、一緒に住むためでもあった。

２人の初任給で住めるところを考えると、そこまで贅沢なところには入れなかったけれど、十分だった。

ちなみに、僕は保険会社に勤め、彼女は新聞会社に勤務することになった。

職業上2人とも色々な場所で色々な人と向き合っていたので、毎日の報告は楽しかったし、同時に彼女からは新しいニュースも聞けた。おかげで、食事の時間もテレビに妨げられることなく2人の時間を大切にできたんだと思う。

一緒に住む様になっても週末ごとのデートは変わらず、毎週遊びに出かけていた。

今日だってそんな内の一日だ。

その日も一日中彼女の服選びやら美味しいスイーツやら色々と見て回った。

夕方、夕飯の支度をするためになだめすかして彼女を家に帰る様に促した。
アパートの部屋のある階に着くと、家の玄関の前に知らない男がたってチャイムを鳴らしていた。
2人で顔を見合わせて僕が「知ってる？」の合図を無言で送ると、彼女からは「さぁ？」の合図がやっぱり無言で返ってきた。

彼女を手前に待たせて男に近寄り問いかけた。

「どちら様ですか？」
男は軽く驚いた様に答えた。
「ここは…えっと…伊藤さんのお宅ではありませんか？」
「違います。篠田ですよ。」
というと、
「あっ、そうですかぁ」
といってすぐに帰っていった。
帰り際に男が待っていた彼女の顔をチラッと見た様な気がした。
彼女を呼んだが、ボーッと去って行く男の背中を眺めるだけで様子が変だった。

「元カレ？」
と茶化してみた。
「とりあえず部屋にもどろ。」
そういってニコリともせずにスタスタと帰ろうとした。

何かいつもと違う彼女に驚きながら後を追って部屋に入った。
部屋に入ると、彼女は玄関に座り込んでいた。
「どうかした？」
「気づかなかったの？」
ちょっときつめの声で尋ねる彼女。
「え？なにが？」
全く分からない。
「あの男よ。前に言わなかった？殺人の…」
「あぁ…なんとなく…」

確か連続で女性を殺しているとかいう話だったはずだ。でも、一番最近の事件はここからかなり離れたところで起きたはずだ。
それに今までこの近くでは起こっていない。

……
「たぶん違う人だよ。今まで近くで起きてないしさ」
「うん、でも…」
「大丈夫だって。毎日しっかり鍵かけてるだろ。」
どこか不安げな彼女を何とか元気付けようよ大丈夫の連発だ。
「ほら、今日はコロッケ食べるんだろ。早くつくんないとさ。」
「んー…そ、だね。ごめんごめん」
そう謝る彼女がなおも不安げなのが少し心配だった。
……どうしてそんなに気になるのか……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0920z/

魂の檻

2011年12月4日00時51分発行